

研究ノート

# 教育実践にモニタリングを活用した 効果に関する一考察

A Study on the Effects of Using Monitoring in Educational Practice

岡田郁子 伊東美穂

Ikuko OKADA, Miho ITO  
旭川大学保健福祉学部保健看護学科

キーワード：モニタリング，教育

## 抄 録

【目的】近年教育においてモニタリングが重要視されており，初等・中等・高等教育全般の学校教育における教育実践にモニタリングを活用した効果を分析，検証することとした。

【方法】「モニタリング」「教育」をキーワードにデータベースは医学中央雑誌 Web 版；Ver.5,CiNii で検索し，研究方法が明確であり，理論的背景を踏まえた原著論文をもとに分析した。

【結果】最終的な 5 件は，実験・準実験研究であった。授業の単元における目標をもとに教育実践にモニタリングを活用した有効性を検討したものが 4 件，授業時に実施しているが単元以外の生活改善を目的として有効性を検討したものが 1 件であった。

【考察】教育実践においてモニタリングを活用することで，方法・目的に応じ視点の明確化，発達段階に応じ実施への工夫は必要だが，自分自身の認知的活動とメタ認知的知識と照らし合わせ知識と文脈が結びつき活動をモニタリングすることが意識化され，適切にチェック・評価・分析され，自分自身の状況を改めて認識し行動が改善していた。

## I. はじめに

近年教育においてモニタリングが重要視されてきている。メタ認知に着目した教育研究が行われ，それらの多くはモニタリングや振り返りに重点を置いており，学習過程におけるモニタリングという機能は大きな役割を担っている。相手のレディネスの把握はもとより支援するなかで相手の状況を常に確認し，成長，発達など変化により関わり方を検討していく必要がある。教育は単に知識・技術の習得のみではなく，思考力・判断力・表現力や探求心を育て，学びに向かう力や人間性などの育成が求められ多面的に捉え支援していく必要がある。モニタリングにより，どのような知識をもち，思考力や行動など細かな状況を把握し個別性のある支援が可能となる。知識をどれだけ理解した

かではなく，どこまでスキルが高くなったかを評価する教育への変換が求められ，今後の教育において筆記試験などによる客観的に数値で評価できることに限らず，学生の能力的視点を含めた把握が求められている。

モニタリングとは，一般的に観測・調査・分析することであり<sup>1)</sup>，自然環境や市場の状況などを継続的に観測・監視することでもある<sup>2)</sup>。心理学では，メタ認知のうち，目標志向的な認知的行為における認知活動の制御の側面をさす下位概念の一つとされ，自己の現在の認知状態や計画あるいは実行中の方略についての情報を収集し，随時設定された基準に照らしてチェック・評価する過程と，新たにプランニングし，現在の活動を修正していく制御過程からなる。こうした過程を含む知的に洗練された認知活動を研究するために，

多義的な解釈が可能な文章あるいは誤りや矛盾を挿入した文章を使用し、読解に際しての注視箇所や注視・反応時間、振り返り頻度、発話プロトコルなどを分析し、モニタリングを促すと考えられる記憶方略を教示し、記名活動の変化を調べるなどの方法が試みられてきた。その結果、モニタリングの発現は、課題に関する領域知識の構造化により促されるが、その頻度や内容は認知的行為それ自体の目標や状況に大きく依存する<sup>3)</sup>。単なる評価ではなく、設定された明確な基準で評価し、その時の活動を修正する過程を含み、注視すべき項目に応じ細かく分析し、その領域の目標に応じ頻度や内容を検討する必要がある。看護では、環境・集団の健康状態の変化を見つけるための定常的・持続的な測定の実施ならびにその分析をいう。保健サービスや保健専門家の仕事を指す場合もある。臨床試験では、治験自体あるいはデータの監視という意味でも用いる<sup>4)</sup>。教育では、教員による児童や学生などを対象者とするもの、自分自身で行うセルフモニタリングなどがあり、庄子ら<sup>5)</sup>は、モニタリングを「メタ認知における振り返り」とし、今後の教育で重要視され、モニタリングは殆どの場合モニタリングすることが目的ではなく、その結果得られた情報に基づいて行動や思考をより適切に修正していくことを目的に行われるとしている。この修正をコントロールと呼び、コントロールができるようになるためにはまずモニタリングができることが前提であり、自分自身についてモニターし、コントロールすることを「自己統制」と呼ぶ。また、ワーキングメモリの弱さが対象児のモニタリング能力にも影響し、モニタリングを適切に行えるような手立てを指導することが必要であり、ワーキングメモリの負荷量への配慮が行動の制御やモニタリングも遂行しやすくなるとしている。設問を細分化することで着目すべきポイントが絞られ、確認すべき事項が焦点化されることで、ワーキングメモリに弱さがある対象児にとっても負荷が大きくなり取り組める。また、課題の結果をモニタリングする際のガイドラインとして順序や内容を明確化し、モニタリングの円滑化を図ること、同じ順序で振り返りを行うことで見通しを持つことができ、自身の言動を振り返る余裕をもつようになり課題遂行時のモニタリングを意識づけることにつながっている。昨今、看護大学生においても状況把握・想起・伝達するスキルの低下が懸念されている。発達段階にもよるが学習時のモニタリングの基準や着目点を細かく明記し、方法の明確化と経験を重ねることも必要と考える。主体的学習の1つのモデルで

ある「自己調整学習」では①課題の定義（課題の条件や難易度の検討、学習者自身の選考知識の評価）、②目標と計画（目標を考え出し、それに近づくための計画をたてる）、③方策の学習（課題それ自体に取り組む）、④メタ認知の適用（操作の実行置換、状況の調整、認知的条件や方略の再構築）へと自己モニタリング、情報の操作や制御を展開しながら4つの段階の学習活動を展開し、主体的な学習は学習方法を自ら選択するのみならず、学習過程の進度を自ら調整し、自らモニタリングすることで達成されていくとされる<sup>6)</sup>。田中は対人関係におけるセルフモニタリングを「社会的な状況や対人関係の中で観察をして、状況を察知する。それを踏まえて状況に対する適切な行動の選択とコントロールを行うこと」と定義し、その結果状況を見極めた行動や自己の内面的変化がもたらされたとしている<sup>7)</sup>。

教育におけるモニタリングの研究では、児童の主体的な学習における共同調整・共同決定のプロセスとして、児童が互いの進捗や理解度をモニタリングし評価する相互モニタリングを行うことで共同調整、共同決定を可能とし難易度の高い学習方法の選択、主体的な学習の展開が検証されている<sup>8)</sup>。グループ学習中における教師のモニタリングとサポートの特徴について、小学校5年生1学級における社会科の調べ学習の授業観察および教師への再生刺激インタビュー、教師にウェアラブルカメラを装着し教師の視野から授業映像の収集を行い分析し、単元の前半では児童の学習への参加状況や学習者像を掴むために俯瞰的にいくつものグループをモニタリングし軌道に乗せるサポートを重視し（俯瞰的モニタリング）、学習者像が見えてきた後半では俯瞰とともに1つの特定のグループのみに焦点をあてモニタリングしサポートしていた（焦点的モニタリング）<sup>8)</sup>。上之園は<sup>9)</sup>、中学生を対象にもの作りにおいても批判的思考における「作業状況判断」としてモニタリングが必要であり探求心が重要な役割を果たすとしている。また、高橋ら<sup>10)</sup>は大学入学時の動機をモニタリングし除籍と留年生には不本意入学者が多くモニタリングの有効性を示唆している。教育におけるモニタリングの研究では、対象者は児童・生徒・学生であり、録画を用いた行動分析した実験研究、チェックリストなど記録物を活用したもの、参加観察など多岐にわたっていた。教育を受けるなかで主体的に学習していくためには学習方法を身に付け、理解し興味をもって知識を増やしそれらを活かすものごとを探求していけるよう支援していく必要がある。充実した学びのために、目的に応じ視点を明確にしたモニタリング

により行動修正できるよう支援が必要である。

日々看護大学生を支援するなかで、授業において学生の状況を捉えることとともに臨地実習における学生の成長、発達を明確に捉え個性に応じた細かな支援、また、学生自身が状況や自分自身を明確に捉え分析し行動修正するスキル向上の難しさを実感している。モニタリングをとおして観測・調査・分析し、設定された基準をもとにチェック・評価することで、新たにプランニングし活動を修正していくスキルを育成し、学生自身による学習方法の見直し、教育者として自分自身の教育方法を見直すことで更に看護に興味をもち自己研鑽していくような支援が可能となると考える。そこで、初等・中等・高等教育全般の学校教育において教育実践にモニタリングを活用した効果を分析、検証することとした。それにより、本学における看護大学生の臨地実習をはじめとする支援にモニタリングを活用する指標となると考える。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 対象論文の抽出

「モニタリング」「教育」をキーワードにデータベースは医学中央雑誌 web 版；Ver.5,CiNii を用いて、2015年～2020年3月までの過去5年間における原著論文に限定し検索した。検索された文献は566件で、次に教育に関連のないもの、対象者が健康者および定型発達者以外のもは除外した85件となり、更に学校教育において教育実践にモニタリングを活用した効果分析し、タイトルまたは抄録にキーワードが含まれ、研究方法が明確であり、理論的背景を踏まえた原著論文とし最終的に5件を分析対象とした。

### 2. 分析方法

デザインされた介入内容とその効果を集約し、実践の要素を明らかにするため論文の概要を示す(表1)。項目は、著者(発表年)、目的、対象者・人数、研究方法、結果とした。研究者らで論文を精読し、項目に該当する内容を記述し、研究方法や介入の主な効果を

表1 論文の概要

著者 (発表年)	目的	対象者	研究方法	結果
野中他 <sup>10)</sup> (2019)	ストレスマネジメント教育(SME)における個人々のコーピングレパートリーの特徴に対する理解を目的としたセルフ・モニタリングが、コーピングレパートリーおよびセルフ・エフィカシー、ストレス反応に及ぼす影響を検討する	公立中学校1・2年生575名 <b>介入群</b> SM群(セルフ・モニタリングを1回目に実施):131名 RX群(リラクゼーション法を1回目に実施):162名 <b>対照群</b> :227名	介入群にはリラクゼーション法・ストレスに関する心理教育を実施し、セルフ・モニタリングとして自身のストレスコーピングの特徴を理解することを目的に自身のストレスコーピング得点をTAC-24の下位尺度ごとに記入 両群Pre期・Post①・Post②期に以下を実施 中学生用ストレス反応尺度 Tri-Axial Coping Scale(TAC-24) セルフ・エフィカシー尺度 コーピングレパートリーを測定する尺度	セルフ・モニタリングの実施によって、コーピングレパートリーが増加し、長期的にはストレス反応の低減につながる事が示唆。
矢野香 <sup>11)</sup> (2018)	プレゼンテーションスキル訓練においてスキルの向上とともに自己評価をすることができるようになる方法を検討する	大学1年生84名 <b>介入群</b> 訓練群:32名 訓練+セルフモニタリング群:31名 <b>対照群</b> :11名	訓練+セルフモニタリング群のみ終了後ビデオを視聴し自分のプレゼンテーションを確認し自己評価を実施、訓練群と対照群はビデオを視聴せず自己評価を実施、訓練群と訓練+セルフモニタリング群は3回プレゼンテーションの訓練を実施、各群でプレゼンテーションスキルとしてルーブリック評価(体系化・言語・資料・話し方・メインメッセージ5項目)を自己評価とともに他者評価を実施し比較検討 更に実験2として、訓練+モニタリング群とそれにモデリングを追加した群で比較検討(各16名、15名)	訓練+セルフモニタリング群が体系化、言語、メインメッセージの評価項目で他の2群より他者評価が有意に高くなりプレゼンテーションスキルが向上していた。訓練前は自己評価が他者評価より高かったが、訓練後両者の差が少なくなり自己評価スキルが向上していた。 モデリングを追加した群は訓練前他者評価が自己評価より高かったが、訓練後差がなくなり、モデリングが具体的な評価基準となっていた。
宮本他 <sup>12)</sup> (2018)	高等学校化学において、生徒による主体的なメタ認知を育成するための指導法を考案し、授業実践を通してその効果を検証する	高校生81名 <b>介入群</b> :41名 <b>対照群</b> :40名	「チェックシールを用いて生徒のモニタリングを活性化するとともに(step1)、他者との話し合い活動の中で自分の行った活動の振り返りを行わせ、次時での活動の改善につなげる(step2)」指導法を考案し介入群に実施、授業前後に著者らが開発した実験中のメタ認知測定質問紙により両群のメタ認知活動の変化を分析	授業後の調査において、「実験方法の理解」「実験方法の点検」「行動の修正」が対照群より介入群が有意に高い得点であった。シールを貼る行動を通してこれから行う実験操作の意味を理解し、物品の点検、自分の活動をモニタリングし、即時的に自分の行動を修正していた。
太桶直也 <sup>13)</sup> (2017)	チームワーク能力を向上させるトレーニングの有効性が時間経過後に確認されるか検証する	私立大学3年生54名 <b>介入群</b> :トレーニングを実施した29名 <b>対照群</b> :25名	チームワークを向上させるトレーニング実施前後に、社会的スキル(KISS-18)、チームワーク能力の5つの構成要素(コミュニケーション能力・チーム志向能力・バックアップ能力・モニタリング能力・リーダーシップ能力)を測定しトレーニングの有効性を検討	トレーニングが実施された介入群において多くの尺度で約9か月後の得点上昇が大きく、トレーニングの有効性が時間経過後に確認された。モニタリング能力の全ての下位尺度である「状況把握」「調整思考」「意見比較」で事後の得点が大きく上昇していた。
広瀬歩美 <sup>17)</sup> (2016)	保育・教育者を目指す学生を対象とし、朝食摂取状況の実態調査を行うとともに、週1回の介入およびセルフモニタリングを用い、朝食欠食改善を試みた	大学生で保育士資格取得のための科目A、Bの受講生115名 <b>介入群</b> :66名 <b>対照群</b> :49名	介入群に週1回の授業時に、過去7日間の朝食の摂取状況、授業当日の朝食内容、1週間の振り返りと次週の目標を調査用紙に記入しセルフモニタリングを6回実施、対照群には5週毎に朝食摂取状況の調査を実施	介入群において平均朝食欠食率は27.4%から16.8%に改善したが、朝食摂取内容には変化はなかった。

評価、分析し今後の課題について検討した。分析過程では研究者間で分析を繰り返し、分析結果の妥当性の確保に努めた。既に公開されている文献が対象のため倫理的問題は特に存在しないが、分析では記述内容の意図を変えないよう努め、結果の管理と著作権の扱いに留意した。

### Ⅲ. 結果と考察

最終的な5件は、実験・準実験研究であった。授業の単元における目標をもとに教育実践にモニタリングを活用した有効性を検討したものが4件、授業時に実施しているが単元以外の生活改善を目的として有効性を検討したものが1件であった。

#### 1. 授業の単元における目標をもとに有効性を検討した研究

宮本ら<sup>11)</sup>は先行研究をもとに、メタ認知を「認知についての認知」と定義し、メタ認知の静的側面である「メタ認知的知識」と動的側面である「メタ認知的活動」の2つを分類・区別し、メタ認知的活動は「メタ認知的モニタリング」および「メタ認知的コントロール」の2つに分けられ、メタ認知的モニタリングは『認知活動の進捗状況や現在の状態を点検・評価すること』とし、メタ認知的コントロールは『進行中の認知活動を調整すること』としている。それらの能力が育成され、対象である高校生が自分の活動をモニタリングするよう意識させることで、そこで得た情報をもとに活動を修正し、コントロールへとつなげることができる。メタ認知を働かせる際に、自分の活動をモニタリングしている生徒ほど、その活動を効果的にコントロールする傾向があるとし、そのメタ認知を高める手段として協同的な活動が有効としている。子どもどうしで互いの考えを表出させることにより、自らの学習についてのモニタリングを促し、クラスの熟達した他者をリソースとして活用し自らの学習を充実させることが期待できるためである。そこで、「チェックシートを用いて生徒のモニタリングを活性化するとともに(step1)、他者との話し合い活動の中で自分の行った活動の振り返りを行わせ、次時での活動の改善につなげる(step2)」という一連の指導法を考案し実践した。生徒は実験中に実験操作そのものに集中するためモニタリングを意識させるのは難しいと考え、モニタリングを意識させるためのツールとしてチェックシートを用いた指導法を考案し、「実験中に操作について

など、何か疑問に思ったり、改善の余地があると考えたとき各自の実験ワークシートの該当箇所にチェックシートを貼る」と教示し、自分の実験中の活動について何らかのモニタリングを行った場合シートを貼るというものである。教師から指示された箇所ではなく活動遂行中のあらゆる場面において自発的なモニタリングが行われ意識化されていた。また、モニタリングは必ずしも課題遂行中にリアルタイムに行われるとは限らず、事後に振り返ってモニタリングすることで内省させた。再生刺激法を参考にしたもので、再生刺激法は子どもの認知・情意過程を把握するために授業場面をあらかじめVTRで収録し、授業終了後に録画された授業の一部を子どもに視聴させ、そのときに考えたことや思ったことを質問紙へ回答を通じて報告させるものであり、VTRの代わりにチェックシートを用いていた。その結果、授業後「実験方法の理解」「実験方法の点検」「行動の修正」が対照群より介入群が有意に高い得点であり、シートを貼る行動を通してこれから行う実験操作の意味を理解し、物品の点検、自分の活動をモニタリングしていた。実験を行うときは手順や疑問や改善点を考えたほうがよいなどといったメタ認知的知識が獲得され、自分の実験活動の改善をすることができていた。またモニタリングしたことをもとに即時的にコントロールを行い、自分の行動を修正していた。チェックシートの使用を続けるうちメタ認知を働かせることが自動化され、自律してメタ認知を働かせていた。

藤井ら<sup>12)</sup>はメタ認知を自分自身の認知的活動とメタ認知的知識と照らし合わせモニタリング・コントロールすることとし、話し合いに参加している学習者が自ら発話を自覚することは児童・生徒にとって難しいことであり観察者を置くことでメタ認知的知識を具体的な発話の中から見いだすことができるようになり、話し合いを外の目からメタ認知することによって知識が文脈と結びついたうえで見いだすことができるとしている。自分の視点のみでは思考する範囲が限定されているとモニタリングが十分に行われない。それに対しシートを活用しモニタリングが意識化され行動が強化されたと思われる。看護大学生であっても何かに集中していると他を意識できない学生がいる。成人に移行する時期であり、成人学習理論のアンドラゴジーとして自己主導的な学習を行っていく段階である。シートなどの物理的な刺激ではなく段階を追って自分で意識することで主体的に行動し学んでいくことができるよう、客観的な視点を育成するため対話を通して知識を

文脈と結び付け視点を広げられるよう明確な言葉で伝えるなどきっかけも必要である。新型コロナウイルス感染症の影響で学内代替実習となり、学生が経験している場面を患者役を通して実際に見る機会があった。患者と話している内容と報告の内容が違う、相手の意図を察知しきれていない現実もまれにあった。臨地実習などで起こった場面を想起し細部まで表現し伝える能力の育成も必要である。まずは自分の認知の傾向を正確に捉えられるよう、振り返り、リフレクションのみではなくセルフモニタリングにより学生自身を客観的に捉えられる支援が必要である。

矢野<sup>13)</sup>はセルフモニタリングとは目標の生起を自分自身で注目しそれを記録することで、目標行動を変化させる機能とし、言語学習や社会的スキルの訓練で効果があるとされ訓練にセルフモニタリングを追加することで、訓練前は他者評価より自己評価が高かったが訓練後両者の差が少なくなり自己評価スキルが身に付けられ、プレゼンテーションスキル向上に役立つことを示唆している。更にモデリングを追加することで、訓練後両者の評価に差がなくなっていたことから、学習者は初期からのモデリングにより具体的な評価基準が明確となり訓練前の自己評価が他者評価より低く、ルーブリックに書かれている文字情報の評価基準だけではなく他者評価が高かった学生の実際の訓練内容を手本としてモデリングすることでどの程度のレベルがあれば評価が高くなるか理解する効果が得られたとしている。野中ら<sup>14)</sup>は、セルフモニタリングとは、自分の行動がどのような頻度で、またどのような状況で生じているのかを観察、記録、評価することによって自分の振る舞いに対する気づきを深める方法であり、その機能として自分自身のターゲット行動を観察し評価することによって、自己強化あるいは自己罰としてその行動を増加あるいは減少させる。またターゲット行動を遂行した後で環境がどのように変化したかということ思い出させる手がかりの機能を有することによって、その行動の頻度を変容させることができるとし、児童・生徒個人が自らの認知的特徴の理解を促し、その特徴に応じて介入内容の定着を促進することができるとしている。セルフモニタリングの実施によって、コーピングレパートリーが増加し、長期的にはストレス反応の低減につながることを示唆され、セルフモニタリングの手続きが自分自身がどのようなコーピングレパートリーをどの程度有しているか児童・生徒自身にメタ的にとらえることを学ばせ、俯瞰的に理解させることを意図して用いられておりコーピ

ングレパートリーの偏りなどタイプに応じコーピングの拡充を促すことができたとしている。ターゲット行動を明確に捉え、記録することでも自分の状況を細かく認識し、一つひとつの行動や思考が意識化され、修正されていったと考える。

太幡<sup>15)</sup>は、チームワークを向上させるトレーニングは「聴く」「説得する」「リーダーシップ」の3つのスキルに関連するもので、実施された介入群において多くの尺度で約9か月後の得点上昇が大きく、トレーニングの有効性が時間経過後に確認されたと述べている。またモニタリング能力の全ての下位尺度である「状況把握」「調整思考」「意見比較」で事後の得点が大きく上昇していた。「調整思考」はチーム内で課題遂行への葛藤が生じた時に発揮される能力であり、トレーニングで学んだことを意識させ実践させる機会があったことが時間経過後に向上していた可能性があると考えられる。チームワーク能力を測定する尺度でモニタリング能力とは「チームの置かれている状況を把握し、他のメンバーの様子を観察し、それに対する自分の行動を確認し、状況に応じて調整していく能力とされ」<sup>16)</sup>、チーム内においてモニタリングの基本的機能である状況を捉え、調整する能力が向上していたともいえる。

## 2. 授業の単元以外の生活改善を目的として有効性を検討した研究

広瀬<sup>17)</sup>は、保育士を目指す大学生の介入群に週1回の授業時、過去7日間の朝食の摂取状況、授業当日の朝食内容、1週間の振り返りと次週の目標を調査用紙に記入しセルフモニタリングを6回実施し、対照群には5週毎に朝食摂取状況の調査を実施し、介入群において平均朝食欠食率は27.4%から16.8%に改善したが、朝食摂取内容に変化はなかった。記述による認識もモニタリングには重要であり、明記されることで一部ではあるが自分自身の状況を改めて認識し生活行動の改善に結びついていたと考える。

## IV. 今後の課題と方向性

教育実践においてモニタリングを活用することで、方法・目的に応じ視点の明確化、発達段階に応じ実施への工夫は必要だが、自分自身の認知的活動とメタ認知的知識とを照らし合わせ知識と文脈が結びつき活動をモニタリングすることが意識化され、適切にチェック・評価・分析され、自分自身の状況を改めて認識し行動が改善していた。

高セルフモニターであることは必ずしも対人関係での適応力が万全であるという事ではなく、外的な情報に振り回されない低セルフモニターのほうが着実な実績をあげることもあり得、実践力の自己評価と他者評価に違いがある<sup>18)</sup>、そのためモニタリングの設問を細分化し明確な基準を提示し、その結果得られた情報に基づいて行動や思考が修正されるよう適切な支援、ガイドラインの明確化が必要である。

実際の教育実践でモニタリングを活用した効果や方法を明らかにした研究は少なく、今後は視点を広げ、原著に限らず、またデータベースを用いた検索に限らず関連文献を網羅できるよう文献を探し一次的研究をもとにシステマティックレビューを行うとともに、日々研究は蓄積されていくため、引き続き定期的なアップデートが必要である。

## おわりに

本論文は日本教育心理学会第62回総会で発表したものに加筆修正したものである。

## 引用・参考文献

- 1) 新村出：広辞苑 第6版，岩波書店，2008。
- 2) 山田忠雄：新明解国語辞典第6版，1484，2005。
- 3) 中島義明：心理学辞典，有斐閣，842，2016。
- 4) 和田攻：看護大辞典第2版，医学書院，2868，2010。
- 5) 庄子果那，青山真二：個別指導におけるモニタリングを促す指導の検討ーケアレスミスの多い小5女兒への算数指導を通して，北海道教育大学紀要。教育科学編69(1)，117-127，2018。
- 6) 笹屋孝允：児童の主体的な学習における共同調整・共同決定のプロセスー複式学級の授業に着目してー，三重大学教育学部研究紀要(70)，397-405，2019。

- 7) 田中広美：対人関係におけるセルフモニタリングの概念分析，日本看護学教育学会誌28(1)，13-23，2018。
- 8) 児玉佳一：グループ学習中における教師のモニタリングとサポートー小学5年生社会科の調べ学習における事例的検討，日本教育工学会論文誌42(3)，283-296，2019。
- 9) 上之園哲也，松浦幹雄，中原久志，勝本敦洋，森山潤：ものづくり活動における生徒の批判的思考の構造，日本教科教育学会誌40(3)，25-35，2017。
- 10) 高橋望，藤本裕介，西本裕輝：琉球大学学士課程における退学・休学・除籍・留年の早期発見に向けた検討：退学等に至る学生の初年次前期のGPAと入学動機の特徴の可視化の試み，琉球大学教育センター報(21)，89-100，2019。
- 11) 宮本樹，木下博義：高等学校化学における生徒の主体的なメタ認知育成のための指導法の開発，日本教科教育学会誌41(1)，11-21，2018。
- 12) 藤井知弘，花館めぐみ：話し合い学習におけるメタ認知の実相ー中学生に対する実験的な学習を通して，岩手大学大学院教育学研究科研究年報(3)，207-218，2019。
- 13) 矢野 香：自己評価の介入によるプレゼンテーションスキル向上ーモニタリング訓練とモデリング訓練導入による他者評価との一致，応用心理学研究44(1)，34-50，2018。
- 14) 野中俊介，原剛，尾棹万純，森田典子，嶋田洋徳：セルフモニタリングがストレスマネジメント教育におけるコーピングレパートリーの獲得に及ぼす影響，Journal of Health Psychology Research31(2)，113-121，2019。
- 15) 太幡直也：大学生のチームワーク能力を向上させるトレーニングの有効性：ーチームワーク能力の構成要素に着目してー，教育心理学研究64(1)，118-130，2016。
- 16) 大久保瞳，高井秀明，浦佑大，辻昇一：ジョハリの窓を用いた自己理解と個人のチームワーク能力との関係：A大学ハンドボール部女子を対象として，日本体育大学紀要49，3027-3033，2020。
- 17) 広瀬歩美：セルフモニタリングによる朝食摂取向上の試み：食育の実践ができる保育・教育者を目指して，聖学院大学論叢=The journal of Seigakuin University29(2)，31-40，2017。
- 18) 秋山真奈美：保育者志望学生のセルフモニタリングの傾向とその客観性についてー改訂版幼児教育職務実践力尺度の有用性を問う，佐野短期大学研究紀要(28)，15-24，2017。